

# 「長征精神」論の現代的位相

## On the Modern Phase of “Long March Spirit” Theory

鏡屋 一  
(Abumiya Hajime)

### Abstract :

The recent policy of reforming the economical system in China, caused the changes in the meaning of “the Long March Myth” as the legitimacy of the Chinese Communist Party, and that caused the changes in the structure of the political authority. The purpose of this paper is the explication of these changes through the studies of the modern phase of “the Long March Spirit” theory in the last ten years.

“The Long March Spirit” theory had a typology which was made by the name of Yang Xiang-kun, Xu Xiang-qian, Jiang Ze-min and Hu Jin-tao. After verifying the typology, this paper tried to clarify the history of the Chinese Communist Party as the series of “Spirits” which appeared one after another in each historical period, and tried to survey the real nature of “the Long March Spirit” and its “enemies”. And finally, it can be outlined that the construction of the Chinese Socialist Spiritual Civilization which announced in 1996, required the series of “Spirits” including “the Long March Spirit”.

キーワード：長征、長征精神、紅軍、中国共産党

Key Word : Long March, Long March Spirit, Red Army, Chinese Communist Party

### はじめに

本研究は「長征精神」論の位相という接近法から、中国共産党の正当性原理としての「長征」神話およびそれを構成要素とする権威構造の変化を検証することを目的とする。本研究が想定しているのは、1980年代以降、改革開放政策の進展とともに顕在化する政治的自由化の要求拡大と党に対する「信念の危機」に対応し「長征」神話の「物語」構造が変化してきているのではないかという仮説である。

「長征精神」に関しては改革開放政策以後、各時期の政治指導者によって言及され、その指標が明示されてきた<sup>(1)</sup>。そこで明示された「長征精神」は、苦難を克服して成功した「過去の経験」に張り付けられたラベルにすぎないとみることができ、その真の「精神」的内容物は、経

済成長と価値観の多様化といった現代中国の状況に対応したもののではないかと考える。「井岡山」「長征」「延安」といった時代の兵站建設をモデルに国家建設を行なった時期とは異なり、世界経済に直接リンクするIT時代において国民の「精神」を束ねる装置が模索されており、「歴史」という道具箱から有用な「物語」が動員されている、というのが本研究の嚮導的概念である。

本稿では以上の関心から、まず「長征精神」論の類型化を試み、次に「長征精神」論を構成要素の一つとする「精神」論史としての共産党史の態様を概観し、そして「長征精神」論の「論敵」を明らかにしてみたい。

## I. 「長征精神」論の類型

### 1. 「長征精神」とは何か

中国現代史上の画期として記述される中国労働紅軍の「長征」については贅言を要しまい。中国国民党軍の包圍掃蕩戦により根拠地の撤退を迫られて行った脱出作戦が「長征」である。1934年より1936年までに湖南省江西省の各根拠地から陝西省北部まで11の省を踏破する「2万5千里」の行軍は、敵の追尾軍から逃れ、敵の封鎖線を突破し、大自然の險阻難関を越え、指導層内部の対立と分裂を経て、兵力の10分の1を失う、受難の行程とされる。この「長征」の経験と教訓を総括するのが「長征精神」である。

楊尚昆の概括に依拠すれば、「長征精神」の内容は次の数点に要約することができる。

- (1) 革命の理論と事業に対する無比の忠誠と必ず成功すると信じる信念。

「長征」という「物語」には多くの受難のエピソードがある。追い迫る数十万の国民党軍との戦闘、党内の「誤った思想」との闘争、河川や高山など無数の天然の障壁を克服しなければならなかった。「長征精神」の第一の要素は、革命事業に対する無比の忠誠と革命必勝の堅い信念である。革命必勝の信念は紅軍指揮官と戦闘員の精神的支柱であり、精神的支柱がなければ、紅軍の長征は成功できなかった。これが長征勝利の原動力であり、長征精神の第一の要義であるとされる。

- (2) 困難と犠牲を畏れず、勇気をもって勝利し、楽観に満ちて勇猛邁進する英雄的気概。

長征中、紅軍は自己に倍する強大な敵と無数の決戦を行い、大きな犠牲を払いながら、最後に敵の追討を振り切り、人跡未踏の高山と湿地帯を抜けてきたことから、紅軍の「長征」は「一に苦を恐れず、二に死を恐れない」精神（毛沢東、徐向前）を体現していると称揚されてきた。

- (3) 大局を考慮し、規律を厳守し、緊密に団結する高尚な品德。

「長征」の途中で数多の困難に遭遇したさい、紅軍の存続を第一の目的とし、同士を救うために自分をも犠牲にする崇高な品德は、「長征」の

成功の重要な要素である。

- (4) 人民大衆と連携し、誠心誠意人民に奉仕して刻苦奮闘する崇高な思想。

紅軍は人民の軍隊であり、人民なくしては生存できない。兵員がなく、食糧がなく、必要な物質的条件がなければ、如何なる精神の力も發揮できない。人員と食糧の補充はその多くを各地の民衆に依拠せざるを得なかった。人民との協力姿勢は有名な「三大規律八項注意」とともに紅軍の顕著な特長である<sup>(2)</sup>。

### 2. 「長征精神」論の類型

「長征精神」について記述された100件余りの文献を検討する中で、構成要素を抽出する方法として、次のいくつかの類型があることに気づかされる。

#### (1) 楊尚昆型

最も早期に登場した類型のひとつであり、既に述べたとおりである。1986年10月22日、当時中央軍事委員会副主席の楊尚昆の「紅軍長征勝利50周年記念大会」での講話に基づいている。すなわち「長征精神」とは、①革命理論と革命事業に対する無比の忠誠、堅定不移の信念；②犠牲を畏れず、敢えて勝利し、楽観に満ちた、一往無前の英雄的気概；③大局を考慮し、規律を厳守し、緊密に団結する高尚な品德；④民衆と連携し、艱苦奮闘、誠心誠意人民に奉仕する崇高な思想、であるとす<sup>(3)</sup>。

#### (2) 徐向前型

楊尚昆と同じく「長征」50周年の際の講話である。いわば一種の「理念型」であり他の類型と混在して使用されることが多い。「長征精神」とは何か。それは主に、①革命英雄主義、集体主義、楽観主義的精神であり、②一に苦を恐れず、二に死を恐れない犠牲的精神であり、③自力更生、艱苦奮闘、勇猛邁進、百折不撓で、誠心誠意人民の利益のために戦う献身的精神である<sup>(4)</sup>。

#### (3) 江沢民型

上記2つの類型から10年後の1996年10月22日、「長征」60周年の記念大会での講話において、江沢民は「長征精神」を次のように概括している。「偉大な長征はついに人民に偉大な長

征精神を残してくれた。この精神とは、①全国の人民と中華民族の根本的利益をすべてより高いとみなす、堅固な革命の理想と信念であり、正義の事業は必ず勝利すると固く信ずる精神である；②救国救民のためにいかなる艱難險阻も怖れず、一切を犠牲にすることを惜しまない精神である；③独立自主、实事求是、一切は実際から出発する精神でもある；④大局を考慮し、規律を厳守し、緊密に団結する高尚な品德；⑤しっかりと人民大衆に依拠し、人民大衆と生死相依り、患難を共にする、艱苦奮闘の精神である<sup>(5)</sup>」。

江沢民の④は楊尚昆③と全く同一である。江沢民型は楊尚昆型より1項増加して5項となっているが、内容としては楊尚昆型を踏襲している。「長征精神」に関する論述の中では最も使用例の多い類型である。

#### (4) 胡錦濤型

江沢民型よりさらに10年後の2006年10月22日、「長征」70周年記念大会での講話で胡錦濤は「長征精神」について江沢民の5項の概括をそのまま繰り返してみせた。ただし、③独立自主、自力更生、一切は実際から出発する精神でもある、となっており、この③項は1ヶ所のみ江沢民型の「实事求是」を「自力更生」に入れ替えている<sup>(6)</sup>。

胡錦濤型は楊尚昆、江沢民という「先輩」類型を忠実に踏襲しているといわざるを得ない。この「精神」内容の抽出がなされた大会の席上には江沢民がおり、その影響力が及んでいたと推測できる。

#### (5) 折衷型

「長征精神」論は自由にその内容を抽出し展開できるものではないようである。「長征精神」論の多くは、上記の類型を継承している。しかしながら、50周年、60周年、70周年の各時期に指導者たちが指摘した類型を逸脱しない範囲での「折衷」型が存在し得る。

その典型的な例について検討すれば、例えば以下のものがある。

ある論者は、江沢民の「精神」指摘を引用した上で、自説を次のように述べる。

「長征精神」とは、①現実に直面し、实事求是

する精神、②勇往邁進し、団結協力する精神、③艱難を怖れず、艱苦奮闘する精神、④その苦しみを見ず、逆にその楽しみを見る革命的樂觀主義である<sup>(7)</sup>。

またある論者は、胡錦濤の名前に触れずに胡錦濤型の5項を引用し、次のようにいう。

「長征精神」とは、①革命に対する無比の忠誠、固く揺るがない理想の信念であり、②苦しみを怖れず、死を怖れない英雄的気概であり、③大局を考慮し、団結協力することである<sup>(8)</sup>。

①は楊尚昆型の①、②は徐向前型の②と楊尚昆型の②の折衷、③は楊尚昆型の③（すなわち江沢民、胡錦濤も共通）である。上記2例は2008年に発表された最新の言及である。「長征精神」は「和諧社会」建設の精神的支柱であると説くことを怠らない70周年以後の時代の論説となっている。「長征精神」の類型は、時期により言及頻度に差はあるが、時間を越えて継承されていることが指摘できる。

## Ⅱ. 「精神」連鎖の態様

過去の経験に教訓を求めようとする観点から見れば、中国の党史研究者にとって、中国共産党の歴史は教訓の宝庫であり、引照すべき「精神」の連鎖であるように見えている。

「中国政治」という範疇には個々の「国民」が有すべき「精神」内容に関する「指示」が含まれている。日本において注目され言及されることは稀であるが、政治運動の背景には、以下に概観するような各時期を表象する「精神」があり、それが連鎖していると見る視角があり、本稿が着目している「長征精神」はその連鎖の一部であるという位置づけとなる。

各時期の「精神」内容の説教臭の強さには閉口させられるが、ここでは、李小三主編『中国共産党人精神研究』に依拠しながらその「精神」連鎖の具体的な態様を概観したい<sup>(9)</sup>。いささか平板であるが党史を概観することになるであろう。

### 1. 新民主主義革命時期の「精神」連鎖

#### (1) 創党精神

1919年5月から1923年12月までの「北洋軍閥支配」時期を表象する「精神」である。中国

共産党が誕生する前後のこの時期は、思想の解放を唱う新文化運動、マルクス主義の受容、結党の土台となる労働運動の登場、青年学生 of 政治運動である五四運動、北京、広州、長沙、武漢など各地共産主義小組の簇生、そして1921年7月23日の上海フランス租界での中国共産党第1回全国代表大会開催を経て、中国国民党との合作に到るまでの重要な事件が相継いだ時期である。

「創党精神」の内容としては、(1)私有制廃止や社会主義社会の実現を目指す、「初期共産党員の堅固な共産主義政治への信仰と遠大な理想」、(2)中華民国初期の暗黒政治、悲惨な経済、腐敗した社会を抉り出すなど、「初期共産党員の時勢を読み、遠い先をうかがう鋭い洞察力」、(3)「半植民地、半封建社会」の中国を、わずか13名の代表による結党から未来の共産主義化した中国を構想するという「初期共産党員の天地開闢の非凡な胆略と勇敢に創造する偉大な気概」が指摘されている<sup>(10)</sup>。

#### (2) 北伐精神

「国民革命」時期(1924年1月～1927年7月)を表象する「精神」であり、「国共合作」という政治路線の選択とその成果である「北伐」の勝利までの精神的傾向を主な内容とする。この時期は、共産党が国民党を革命化し軍閥掃討に決起した「北伐」、共産党指導下での労働運動の拡大、コミンテルンの援助を得て「革命精神で武装し」政治教育と軍事教育を実施する黄埔軍校の設立と新式党軍の錬成が指標となる。

この時期の共産党員の、革命的立場を堅持する「精神」、国民党右派の攻撃にも関わらず大局的観点から国民党との合作を維持し続ける「精神」、国民党その他の政治集団と共同で敵に立ち向かう「精神」が「北伐精神」とであるとされる<sup>(11)</sup>。

#### (3) 井岡山精神

1927年8月から1937年7月までのいわゆる「ソヴィエト革命」期は、南昌蜂起、秋収蜂起、広州蜂起、農村革命根拠地建設、土地革命実施、ソヴィエト政権樹立、長征取行など中国共産党にとって存続にかかわる時期である。「井岡山精神」、「蘇区精神」、「長征精神」はこの時期の

産物である。

「井岡山精神」は1927年10月に江西省南西部に建設された井岡山根拠地の闘争の歴史に基づいて形成された。困難な条件下で革命の成功を期して敵との戦闘を展開する「堅固な信念と艱苦奮闘」の「精神」、農村から都市を包囲するという現実路線を切り開く「实事求是と新路突入」の「精神」、地元農民の支援を得て民衆と一体化する「民衆に依拠しつつ勝利へ邁進する」「精神」がその内容である<sup>(12)</sup>。

#### (4) 蘇区精神

「蘇区」とは「蘇維埃(ソヴィエト)地区」を指し、井岡山根拠地建設の発展形態として毛沢東、朱徳ら指導者が切り開いた全国最大の革命根拠地が、江西省の「中央蘇区」であった。「中央蘇区」は1930年10月の形成から1934年10月の喪失までの間、全国ソヴィエト運動の指導的中枢として機能した。

当時の共産党の最も逼迫した中心的任務は、民衆を動員し、組織し、武装して、国民党の包圍攻撃を防戦しつつ、政権維持を図ることであり、その中で形成された「蘇区精神」は、中国共産党員の刻苦奮闘、不撓不屈の「精神」とされ、「執政は民のためにし、誠心誠意民衆の利益を図る」こと、「実際の調査と研究を重視する」こと、物資不足の中での「勤儉節約」、「廉潔奉公」などがその「精神」の内容である<sup>(13)</sup>。

#### (5) 長征精神

「長征精神」については既述のとおりであるが、「精神」連鎖の中では、直接に「蘇区精神」を継承し次の「延安精神」へと接続する位置に置かれている。

#### (6) 延安精神

1937年7月から1945年8月までの「抗日戦争」時期、すなわち延安における根拠地建設と抗日民族統一戦線の結成を経て抗日戦争が終息するまでのこの期間には、「延安精神」と「抗戦精神」の2つの「精神」が登場する。

延安は「中国革命の聖地」であり、「長征」開始の1935年10月から党中央を華北へ移転させる1948年3月までのほぼ13年間、党中央と毛沢東は陝北地区、延安にあり、作戦を練り、中国革命の前途に関わる一連の重大な決定を行な

い、全国の政権を奪取するために堅固な基礎を築き「延安精神」を育んだ。

「延安精神」とは、中国共産党が延安時期に、丹誠こめて錬成した正しい政治的方向、実事求是の思想路線、誠心誠意人民に服務する原則、自力更生・艱苦奮闘の創業精神を主要な内容とする革命精神であるとされる<sup>(14)</sup>。

### (7) 抗戦精神

日本軍との戦闘を推進する中で形成されたのが「抗戦精神」であり、その内容は「暴力を恐れず、屈辱に甘んぜず、身を捨てる愛国精神」、「万衆一心、心を合わせて助け合う団結精神」、「百折不撓、徹底奮闘の堅忍不拔の精神」である<sup>(15)</sup>。

### (8) 西柏坡精神

抗日戦争終了後、国共間の内戦が再開する。1948年5月、毛沢東、党中央、解放軍総部は、河北省保定市西方にある平山県西柏坡村に移動し、国民党との内戦、三大戦役、全国の農村の解放を指導した。この時期より1949年10月の人民共和国建国までの党中央の一連の「精神」を指して「西柏坡精神」という。「西柏坡精神」の本質は、2つの「敢於（敢然）」、2つの「務必（必須）」である。2つの「敢於」とは、「敢於闘争、敢於勝利（敢然と闘争し、敢然と勝利を勝ち取る）」ことであり、戦いに臨む勇氣、革命英雄主義の精神を体現しており、一方、2つの「務必」は、「務必保持謙虚謹慎的作風、務必保持艱苦奮闘的作風（謙虚で慎み深い作風を保持すべきであり、艱苦奮闘の作風を保持すべきである）」をいい、謙虚に驕ることなく、忍耐強い努力の必要を説いている<sup>(16)</sup>。

## 2. 社会主義建設時期の「精神」連鎖

### (1) 大慶精神

1960年の大慶油田開発は、王進喜ら開発者たちの献身的な努力で成功し、その後中国における工業化のモデルとして称揚された。1990年2月に江沢民が黒竜江省を視察したさい、「大慶は物質的財産を生み出したと同時に、党、国家、労働者階級のために貴重な精神的財産をもたらしてくれた。それは中国の労働者階級の風貌を体現した大慶精神である。すなわち国のために名誉を競い、民族のために頑張る愛国主義精神

であり、独立自主、自力更生の艱苦創業の精神であり、科学を講究し、『三老四嚴』の求实精神であり、大局を思い、国のために憂いを分担する奉獻精神である」と述べたことから、「愛国、創業、求实、献身」の精神であると概括され称揚されている<sup>(17)</sup>。

「三老」とは、まじめな人間（老実人）になり、まじめなこと（老実話）を言い、まじめな仕事（老実事）をすること。「四嚴」とは、仕事に対して、厳格な要求、厳密な組織、厳肅な態度、厳格で明確な規律を持つことを指す。

### (2) 紅旗渠精神

しばしば深刻な自然災害に見舞われる河南省林県は大旱魃に備えて1960年代に10年がかりで「人工天河」紅旗渠を完成した。機械設備がなく、連年の災害で食糧も欠乏する中、120の山をつぶし、211のトンネルを掘り、152の水路橋を作り、1818万立方メートルの土石を掘ったという。「紅旗渠精神」とは、そのさいの「自力更生の精神」、「百折不撓の創業精神」、「大局を配慮して一致協力する団結精神」、「犠牲を畏れない無私奉獻の精神」である<sup>(18)</sup>。

### (3) 戦勝自然災害精神

1976年7月28日のマグニチュード7.8の唐山地震では、およそ24万人が死亡した。全国の援助と唐山の人々の復興努力で、1週間後には飲料水と衣食の問題が解決され、1カ月のうちに電源・水供給、交通、電信などライフラインが復活し、1年後には工業生産が全面的に回復した。その「公而忘私」、「艱難与共」、「百折不撓」、「勇往直前」の「精神」を指して「戦勝自然災害精神」という<sup>(19)</sup>。

### (4) 「両弾一星」精神

「両弾」は原子爆弾と水素爆弾、「一星」は人工衛星である。中国は1964年10月に最初の原子爆弾の実験に成功し、1967年には水素実験にも成功した。また1960年に最初の探索ロケットと近距離ミサイルの発射に成功し、1970年4月24日、最初の人工衛星打ち上げに成功した。その間、中ソ関係の悪化から、1959年にソ連の専門家が撤退し、自力開発を余儀なくされた。50年代には李四光、朱光亜、銭学森、鄧稼先らおよそ3000名の留学生が「両弾一星」開発のた

めに帰国し、数十万の人員が開発に従事したといわれる。ここから「両弾一星」精神は、愛国主義、無私献身、自力更生、団結協力、そして科学的探究の精神をその内容としている<sup>(20)</sup>。

#### (5) 焦裕禄精神

焦裕禄(しょう・ゆうろく)は1922年生まれ、山東省淄博市の人。連続3年の自然災害(冠水、風沙、塩害)の被害で食糧生産が最悪となっていた蘭考県の党委書記となり、身を粉にして災害対策に奔走、わずか1年半で149の生産大隊のうちの120を訪問し、砂丘や河川などの実地研究を行なうなど無理がたたり、1964年に肝臓病のため死亡した。享年42歳である。1966年2月7日『人民日報』が「県委書記の榜様——焦裕禄」で焦裕禄の業績を紹介し、全国で「焦裕禄に学ぶ」ブームとなった。「焦裕禄精神」は、誠心誠意人民に服務し、着実な調査を踏まえる实事求是の精神であり、人民と苦楽を共にし、苦しみを先に楽しみを後にする廉潔奉公の精神であるとされる。1994年に胡錦濤が焦裕禄逝世30周年の集会で講話を行い、その刻苦奮闘と清廉勤勉を称賛している<sup>(21)</sup>。

#### (6) 雷鋒精神

現代中国を研究する日本人で雷鋒(らい・ほう)を知らないものはいない。1940年に湖南省の貧農の子として生まれた雷鋒は人民解放軍に入隊し自動車兵となり、自己犠牲と節約に基づく革命精神から「毛主席の好戦士」の称号を得たが、1962年8月風雨の中の事故で殉死した。享年22歳である。1963年3月に毛沢東が「雷鋒同志に学ぼう」を著し、学習運動が始まった。「雷鋒精神」としては、人民への奉仕、刻苦奮闘、勤儉質素、自己犠牲の精神などがその内容となる<sup>(22)</sup>。

### 3. 改革開放時期の「精神」連鎖

#### (1) 小崗精神

改革路線への転換を果たした中国共産党11期3中全会が開催された1978年12月、安徽省鳳陽県小崗村の18戸の農民が先駆けとなり「大包干(全面請負制)」を始めた。中国農村改革の幕開けである。この「大包干」精神、すなわち小崗精神とは、全国に先んじて新たな試みに踏み出した進取の気性をその精髓とし、人民

公社時代(統一経営、集中労働、労働に応じた分配、吃大鍋飯(一律待遇))とは異なり、農村の発展を支える自主性、内発性、主体性、積極性など農民の創業の熱情がその「精神」の内容である<sup>(23)</sup>。

#### (2) 華西精神

無錫市と蘇州市に近い江蘇省江陰市の華西村は、380戸、1520人、0.96平方キロの小村であったが、80年代に工業化を開始し、全村の富裕化に成功した。2004年の村民の平均収入は全国農村の41倍強となる「天下第一村」であり、社会主義の新農村建設のモデルケースとして注目されている。

いわゆる「華西精神」は、「堅固な共産主義の理想と信念」、「団結奮闘、共同致富の政治原則」、「苦難を乗り越えて実行する資質」、「客観的科学的態度」であるとされる<sup>(24)</sup>。

#### (3) 女排精神

「女排」とは女子バレーボールを指し、1981年1月の第3回ワールドカップで中国の女子バレーボールチームが優勝して以来、1982年の世界選手権、1984年のロサンゼルス・オリンピック、1985年のワールドカップ、1986年の世界選手権で優勝し、5連勝を達成した。2003年11月の日本開催の第9回ワールドカップでは11戦全勝の優勝。2004年のアテネ・オリンピックで、ロシアに競り勝ち優勝している。

「女排精神」はまず祖国の榮譽を重要視する愛国主義精神であり、また団結協力し、必死に戦い、勝利する「精神」である。「女排精神」は人々の積極性を引き出し、困難に立ち向かうよう激励し、小康社会の美しい理想の実現を早めるのに有用である、と説かれる<sup>(25)</sup>。

#### (4) 浦東精神

2010年の上海万博の開催地となる浦東地区は中国の経済成長の象徴的存在である。浦東の開発は最初から明確な戦略構想をもっていた。浦東開発を手始めに、上海を国際経済、金融、貿易、運輸の中心的地位に置き、長江経済の発展をもたらす、というものである。「団結協力、進取開拓、速度と収益の追求、臨機応変の能力、大衆に奉仕する原則」が「浦東精神」の内容であるとされる<sup>(26)</sup>。

### (5) 張家港精神

江蘇省の港灣都市、張家港は、1990年代以来、経済建設（物質文明）のみならず民衆の素質向上など精神文明における現代化の成功例として知られている。「開拓創造し、不断に思想の大解放を進める」都市文明建設のモデルとして「張家港精神」が称揚されている<sup>(27)</sup>。

### (6) 孔繁森精神

孔繁森（こう・はんしん）は、1944年に山東省の寒村に生まれ、17歳で入隊し、1966年に中国共産党に入党、1979年に単身チベットに赴任。3年間、海拔の高い崗巴県党委員会副書記として地元住民のために尽力した。1988年に2回目の赴任となり1992年に任期満了となるが、孔繁森はチベット残留を希望し、阿里地委書記に任命された。厳しい生活条件の中、同地区の住民とともに勤勉に発展に取り組んだ。1994年11月、新疆視察の帰路、交通事故で殉職した。

破れた衣服は自ら修繕するなど、孔繁森の生活はきわめて質素で、長い間幹部の地位にあったが職権を利用して私利を貪ることはなく、現地の孤児3人を引き取り養っていた。

「拜金主義、享楽主義、利己主義」と概括される共産党幹部の汚職がはびこる中、誠心誠意人民に奉仕する孔繁森は、廉潔な幹部として共産党員の道徳的規範を体現する模範だと称揚されることになった<sup>(28)</sup>。

### (7) 九八抗洪精神

洪水との戦いも「精神」に数えられる。1998年、長江流域、嫩江、松花江流域で百年規模の大洪水が発生したが、軍隊と民間、幹部と民衆が団結協力して対処した。これを「九八抗洪」という。「解放戦争時代の軍民共同の感動の場面を再現し」、「全党、全軍、全国人民、全中華民族の心が空前の一体化」を遂げることを可能にした、この「九八抗洪精神」は、「万衆一心、衆志成城、不怕困難、頑強拼搏、堅忍不拔、敢於勝利」の偉大な「精神」と称揚されている<sup>(29)</sup>。

### (8) 航天精神

「航天精神」はロケット打上げの「精神」である。2005年10月、有人宇宙船「神舟6号」の打上げに成功。2007年10月24日、中国初の月探査機「嫦娥1号」が発射され、11月5日に月軌

道に乗った。これについて胡錦濤は、2005年11月26日開催の「隆重慶祝神舟六号载人航天飛行円満成功大会」で講話をし「航天精神」として概括した。「航天精神」とは「科学求实、開拓創新、艱苦創業、勇攀高峰、団結協作、無私奉獻」の「精神」である<sup>(30)</sup>。

近年の事例について付言すれば、このほかに、三峡ダム建設プロジェクト推進に由来する「三峡移民精神」、過去百年間の雪辱を果たした「北京オリンピック精神」、2003年に流行したSARS（重症急性呼吸器症候群、中国語は「非典型肺炎」）と戦う「抗擊『非典』精神」なども「精神」連鎖に組み込まれている<sup>(31)</sup>。

以上、あたかも「精神」の百貨店のような中国共産党の各時期における「精神」の連鎖を展望すれば、「井岡山」、「長征」、「延安」時代は、現在の中国共産党政権の根幹にあたる「精神」要素であり、これらの時代を表象する「精神」の稀薄化や喪失は、多党制による政党政治のなかで政権を掌握する政党とは異なり、党の軍隊の力で中華人民共和国を建設し、「中国の特色ある社会主義現代化」を牽引する政権を担う中国共産党の特殊性の核となる部分であることがうかがえる。

## Ⅲ. 「長征精神」論とその「論敵」たち

上述のとおり現在の胡錦濤時代の「長征精神」の内容は江沢民時代のそれを踏襲するものであったが、しかし多くの論者の引照例を検討すれば、江沢民時代の「精神」論はきわめて深刻な現実に対応して提唱されていたように観測できる。以下では、そのような現実問題のいくつかを指摘してみたい。

### 1. 指導体制内部の分離・分裂に対する牽制と抑止

ある論者は「長征精神」の「緊密な団結」の側面に言及しつつ、かつての王明「左」傾冒險主義、張国濤右傾分裂主義に触れながら、指導体制内部の分離・分裂に対し警鐘を鳴らしている。

「全軍の将兵は大局的観念を強化して、自覚的に国家経済建設という中心任務に服従しなけ

ればならない。〔中略〕軍政間、軍民間の革命的  
大団結を強固にし、わが軍の集中統一と団結安  
定を高度に重視し維持する必要がある。絶対に  
縄張り主義、セクト主義、小団体主義を許さな  
い。自覚的に民主集中制と党委員会の集団指導  
下の首長分担責任制を堅持し、各級の指導グル  
ープ内部の団結を不断に強化しなければなら  
ない<sup>(32)</sup>〕。

天安門事件以後の改革開放体制の推進鈍化と  
軍の抬頭に対する反動があり、それに起因する  
亀裂が指導層内部にあったのではないかと推測  
させられる部分である。

またある論者は、指導層の分離分裂と風紀の  
紊乱について次のように指摘している。

「長期の平和な環境の影響で、現在、部隊の内  
外、上下の間の団結にとって、注意しなければ  
ならない傾向が現われている。内部では、ある  
単位の将兵の間で、また同志の間で、艱難を共  
にするという観念が薄くなってしまっている。  
少数の幹部は自分が多くの兵士の上にいるとし  
て、兵士の人格や民主的権利を尊重せず、甚だ  
しくは殴ったり怒鳴ったりして兵士に体罰を加  
える現象が現われている。同志と戦友の間でも、  
団結友愛、相互の譲り合いの精神が弱くなっ  
ており、つまらないことできりのないケンカを  
したり、とっくみあいをしたりすることがとき  
どき発生している。商品交換の原則も部隊の  
政治生活や人間関係に影響を与えはじめてい  
る。何人かは酒や煙草を賄賂にしたり、贈物を  
して渡りをつけたりする良くない風習に染まっ  
たりしている。対外関係でも、軍民、軍政関係  
をしっかりとやることを重視しない傾向が増大  
しており、大衆の苦しみに関心を払わないとい  
う問題もいろいろな程度で存在している。少数  
の人は、被災区の人民への援助金や物資につ  
いても負担だと思ふものがある。これらの認識  
と問題は、いずれも革命の隊伍の内部、および  
軍政、軍民の団結を強化する妨げとなる<sup>(33)</sup>」。

この論者は、中国人民武装警察部隊、「武警」  
と略称される、党軍管轄下の治安部隊の所属  
であろうと推測される。記述からは「紅軍」の  
伝承者としての矜持が感じられる。改革開放  
政策がもたらした軍内部の負の影響が非常に具体的

な形でわかりやすく指摘されており興味深い。  
この論者の見解では、拝金主義、享楽主義、極  
端な個人主義の蔓延、党風、社会の風紀の破壊  
といった劣悪な状況は、西側の「敵対勢力」に  
よる「西化」「分化」政策、封建主義・資本主義  
の腐敗した思想と文化の流入が原因であると指  
弾される<sup>(34)</sup>。このいわゆる「ブルジョア自由  
化」批判については、次に見るように多くの論  
者の指摘するところでもある。

## 2. ブルジョア自由化と思想の混乱

江西省高安市党委員会のある論者は、「長征  
精神」の刻苦奮闘の特長指摘をしながら、「党の  
指導を堅持する」こと、「党の建設を強化する」  
ことが「社会主義現代化建設に勝利する」保証  
であるとして、多党制、および軍の脱共産党化  
(国家化)の主張を次のように強く否定してみ  
せた。

「改革開放以来、一部の頑固にもブルジョア  
階級の自由化思想を堅持する者が、中国では  
『一党専政を排除し』、『複数政党が輪番に執  
政する』ことを実行し、『軍隊も非党化する』  
べきであると提起している。これは根本的に党の  
社会主義事業に対する指導を否定し、党の軍隊  
に対する絶対的指導を否定し、そして社会主義  
制度を顛覆し軍隊の色を変えようとする彼ら  
の目的を達成するためなのである。これは絶対  
に許すことはできない<sup>(35)</sup>」。

天安門事件後は反「ブルジョア自由化」キャ  
ンペーンが行われたが、1992年の南巡講話  
以後、社会主義と資本主義の相違を過少評価  
する見解が現われるなど、事件後の保守化への  
反動が顕在化している事態に対する強硬な対応  
であると考えられる。

## 3. 国際的平和顛覆の危機

国際的平和顛覆(原語は「和平演変」とは、  
西側諸国や反共団体が、資本輸出、文化交流、  
情報発信などの平和的手段によって社会主義  
体制を顛覆させることを指し、中国にとっては  
その実例がソ連・東欧諸国の社会主義放棄  
であり、天安門事件での党批判もその顕在化  
として理解され、それゆえ天安門事件後の中  
国では

「平和顛覆」にたいする警戒が呼びかけられていた。

「長征精神」が体现する「崇高な革命に対する理想」の喪失を危惧するある論者は、「ソ連東欧の急変があり、社会主義を敵視する帝国主義と反中国勢力が顛覆を狙っている。[中略]もし理想を失えば、帝国主義の『平和顛覆』の陰謀が逞しくなる。ベテランの革命家の不断の長征がもたらした勝利の成果が一日でだいなしになってしまう<sup>(36)</sup>」と「警鐘」を鳴らし、「革命的英雄主義」による奮起が必要であると説く。

またある論者は、「改革開放以来、我々はより多く外部の物に接触し、多くの者が外部の色とりどりで美しい世界に惑乱され、茫然として、なすすべを失ってしまっている。西側の各種の思想が入り込むにつれて、多くの者が共産主義の信仰を放棄し、転じて西側ではしだいに淘汰されている『金銭万能』を崇拜するようになってしまった。意外にもこれはまさに西側の『平和顛覆』のワナにはまったためである。精神の支柱のない民族は希望のない民族である。それはいつも滅亡の危険に直面している<sup>(37)</sup>」と「平和顛覆」の危機を強調し、「改革開放」という中国の「新たな長征」には「長征精神」のもつ共産主義の理想と信念が必要であると主張している。

#### 4. 幹部層の腐敗・汚職の蔓延

中国の指導幹部層の腐敗や汚職については、しばしば政治闘争がらみの大物幹部の逮捕処罰が一罰百戒的に報道されており、よく知られている。このような腐敗・汚職の原因を「長征精神」の喪失に求める見解があるので、ここに紹介しておく。

「長征精神」とは苦しみを恐れず、死を恐れない精神、つまり艱苦奮闘の精神であると説くある論者の次のような記述からは怒りの混在した嘆息が聞こえてくるようである。

「ある同志は政治信念が動揺し、全局に関する問題、政治方向に関する問題、根本原則に関する問題においてははっきりせず不安定である。またある人は局部的な小団体の利益のために国家的大局の利益を損なってしまう。ある

者は、個人の名誉や利益を追求するために人脈づくりや人付き合いに熱心で、おもねったりなれあったりする極めて通俗的な作風を党内に持ちこんでいる。ある者は意欲が揮わず、進んでやろうとせず、民衆についての考えも淡白で、人民に尽くすという観念も薄れてしまっている。ある者は飲食や享楽など腐った生活を追い求め、正しく権利を行使することもできず、職権で私利を謀っている。これらの問題は、すばやく解決できなければ、社会主義の現代化事業に影響を与える。新しい歴史的時期に、長征精神を提起し堅持し発揚するのは極めて重要であることは明らかである<sup>(38)</sup>。

このような幹部の腐敗に対する憤りに近い批判は、1996年の60周年の時期における「長征精神」論者に共通する見解であるといってもよい。例示をすることで枚挙に遑がないが、60周年限定ではなく、2006年の70周年時代にも共有し得る例証として、青海大学社科系の教員の指摘を紹介してみたい。

「問題の深刻さは、ある時期に、わが党の主要な高級指導幹部が真剣に刻苦奮闘の教育をしなかった（あるいは艱苦奮闘をまったく説かなかった）ばかりか、逆に『高消費』を得々と称賛し、初級段階の『腐敗不可避論』や『企業特殊論』等の誤った観点を極力宣伝したことにある。彼らの誤った思想の影響で、いくつかの宣伝メディアの導く方向も一時誤った道に入り、艱苦奮闘の世論を破壊しても、ひそかに頼むところがあって恐れることなく、幾人かは懸命にブルジョア階級の人生観、道徳観、価値観を鼓吹し、『個性の解放』を鼓吹し、ほしいままに享楽主義を主張し、『利己的なのは人間の本性である』などと鼓吹し、すべては『向銭看（拝金主義）』であるとし、公然と極端な個人主義と実用主義を売り広めた。したがって、祖国の大地に不正の風、腐敗の風が吹き、深刻なことに我々の各級の指導幹部をも腐蝕させ、職権で私利を謀り、奢侈を求め、派手を好み、豪勢さを競い、享楽にふける。はなはだしくは、出世して威張り、横暴に振る舞い、横領や収賄をし、公費を使い込み、腐敗墮落し、犯罪の道を歩むようになる者もいる。これらは人民大衆に極め

て劣悪な影響をもたらし、党のイメージを大いに損ない、改革開放と現代化建設を阻害しているのである<sup>(39)</sup>】。

改革開放政策を推進して以来、鄧小平や指導者は「艱苦奮闘の創業精神」をもって絶えず戒めてきたが、「奢侈の風と腐敗の現象が深刻となり、社会の風紀も乱れ、醜悪な現象が氾らんしている」と説くこの論者は、鄧小平らの無作為と「先富論（可能な者から先に裕福になれという主張）」を否定する含意をもって、現状を批判している。

## むすびにかえて

### 1. 「長征精神」論の起源

「長征精神」論とその「論敵」たちの態様を観察して気づかされることは、指導体制内部の分離・分裂に対する牽制と抑止、ブルジョア自由化と思想の混乱、国際的平和顛覆の危機、幹部層の腐敗・汚職の蔓延といった現象は「改革開放」の結果として出来た「精神」の問題であると理解されている点である。

1996年という時点に注目すれば、「長征精神」論と「社会主義精神文明建設」論との同調を考えなければならない。

1996年10月、中国共産党14期6中全会が開催され、「社会主義精神文明の建設を強化する若干の重要問題について」の中共中央の決議が採択された。この「決議」においては「敵対勢力」による「西化」「分化」の陰謀の存在が指摘され、「社会主義精神文明」の建設による「拜金主義、享楽主義、個人主義」の抑圧が言われ、「資本主義と封建主義の腐敗した思想」を抑制しなければならないことが主張されている<sup>(40)</sup>。

この「決議」の中では「長征精神」論の「論敵」たちの原形が別出されており、「長征精神」論が発生する起源、あるいは「長征精神」論が栄養源とする拠りどころは、この「決議」であったと見るべきことを示唆している。必ずしも党中央の見解ではないが「論敵」のうち鄧小平の改革開放路線の負の「成果」に関する批判があったことは、江沢民時代の保守派の心理状態をよく示しているように思われる。

「社会主義現代化」の「精神」建設面を指す概

念として「社会主義精神文明」が提唱されるのは、1979年の11期4中全会における鄧小平の講話に始まり、1982年の第12回党大会において「理論」化されるが、これが「長征精神」を鑑とする「論敵」を明確にするのは、天安門事件直後に開催された1989年6月23日からの13期4中全会における「社会主義精神文明建設」の強化の主張からであるとみてよいだろう。ほかでもなく江沢民が総書記に就任したのはこの大会においてであった。1996年に大規模に展開される「長征精神」論を含む中国共産党史における「精神」連鎖観の出自はここにあるのではないかとさしあたって考えてみたい。

### 2. 「西柏坡精神」と「艱苦奮闘」の強調へ

新疆大学のある論者は、共産党員の傲慢に対する憤りを次のように指摘している。

「党と国家の幹部が必ずや注意しなければならないことは、官位や職位の高さとかベテランの資格などで飯を食おうとしてはならないことだ。問題を正しく解決することによって飯を食うべきである。正しさによるのであって、資格があるとか俺様がエライと威張ったり、役人風を吹かせたりしないことだ<sup>(41)</sup>」。

これも「長征精神」論に依拠した幹部批判のひとつであるが、体制批判になりかねないという点では、胡錦濤体制にとっても両刃の剣であろう。

2002年11月、第16回党大会において総書記に選出された胡錦濤が翌12月、最初の視察を行なったのは、河北省西柏坡である。胡錦濤はかつて西柏坡において毛沢東が主張した2つの「務必（必須）」すなわち「謙虚で慎み深い作風」と「艱苦奮闘の作風」を引用し、謙虚に驕らず奮闘することを全党に呼びかけた。胡錦濤は「長征精神」から「西柏坡精神」へシフトしたように見える。今後は党の歴史の中から「艱苦奮闘」の「精神」が発掘されるであろう<sup>(42)</sup>。江沢民時代から胡錦濤時代への変遷の形跡であると考える。

## 【註】

- (1) 「長征精神」に関しては、さしあたり、陳宇『長征精神論』（藍天出版社、2006年）、高鳳林『長征 歴史地位和作用新探』（中国社会科学出版社、2008年）、楊文嶺主編『長征中的政治工作』（人民武警出版社、2006年）を参照。
- (2) 李小三主編『中国共産党人精神研究』（中央文件出版社、2008年3月）210～212頁。
- (3) 楊尚昆「在紀念紅軍長征勝利五十周年大会上的讲话」、楊尚昆「総結歴史經驗繼承和發揚長征精神在改革開放和現代化建設中建功立業」『人民日報』1986年10月23日。陳勇「長征精神研究綜述」『毛沢東思想研究』2006年第5期）5頁。
- (4) 李清「長征精神の内涵及時代意義」『党史文苑（學術版）』2006年第22期）20頁。宋曉波「近十年來長征精神研究述評」『理論學習』2006年第10期）22頁。高維良「繼承和發揚長征精神研究綜述」『長征大事典』編委会編『長征大事典』（貴州人民出版社、1996年9月）2267頁。
- (5) 江沢民「在紀念紅軍長征勝利60周年大会上的讲话」『人民日報』1996年10月23日。『江沢明文選』第1卷（人民出版社、2006年）590頁。
- (6) 胡錦濤「在紀念長征勝利70周年大会上的讲话」2006年10月22日（『人民日報』2006年10月23日）。
- (7) 湯超「長征精神鄒析」『才智』2008年第20期）210頁。
- (8) 王愛霞、高鳳林「長征精神の内在邏輯関系及其時代価値」『延安教育学院学報』2008年第2期）1頁。
- (9) 李小三主編『中国共産党人精神研究』（中央文件出版社、2008年3月）。
- (10) 同上、197～198頁。
- (11) 同上、200頁。
- (12) 同上、204～206頁。
- (13) 同上、207～210頁。
- (14) 同上、214～218頁。
- (15) 同上、218～221頁。
- (16) 同上、221～223頁。
- (17) 同上、223～228頁。
- (18) 同上、228～233頁。
- (19) 同上、233～234頁。
- (20) 同上、235～239頁。
- (21) 同上、239～243頁。
- (22) 同上、243～249頁。
- (23) 同上、251頁。
- (24) 同上、254～256頁。
- (25) 同上、259～262頁。
- (26) 同上、262～265頁。
- (27) 同上、266～269頁。
- (28) 同上、269～274頁。
- (29) 同上、274～275頁。
- (30) 同上、278～281頁。
- (31) 柳礼泉『中国共産党对艱苦奮闘精神の發展与昇華』（湖南大学出版社、2008年）194頁、202頁、218頁。
- (32) 劉華清・張震「長征精神永放光輝——紀念中国工農紅軍長征勝利60周年」（『求是』1996年第20期）998頁。
- (33) 史東輝「弘揚長征精神 做紅軍伝人」（『武警学院学報』1996年第4期）6頁。
- (34) 史東輝、同上、4頁。
- (35) 劉慶陽「發揚長征精神 [搞]好現代化建設」（『党建研究』1996年10期）21頁。
- (36) 楊迎春「發揚長征精神 走好新的長征」（『錦州師範学院学報（哲学社会科学版）』1996年第4期）114頁。
- (37) 林明「試論長征精神の哲学基礎」（『广西梧州師範高等専科学校学報』1996年第4期）39頁。
- (38) 張美琴「論新時期堅持“長征精神”」（『贛南師範学院学報』1996年第5期）65頁。
- (39) 傅音「簡論大力弘揚長征的艱苦奮闘精神」（『青海社会科学』1996年増刊）70頁。
- (40) 『人民日報』1996年10月11日、10月14日。趙劍英主編『復興中国 中共第三代对中国現代化的新追求』（社会科学文献出版社、1999年1月）361頁。
- (41) 朱瑛「跨世紀的精神動力——紀念中国工農紅軍長征勝利60周年」（『新疆社科論壇』1996年第4期）67頁。
- (42) その典型的な文献として、例えば、柳礼泉『中国共産党对艱苦奮闘精神の發展与昇華』（湖南大学出版社、2008年）がある。

